

日本とタンゴの長~い関係

西村 秀人

私がタンゴを聞き始めたのが1987年、以後アルゼンチン・タンゴの発展史を主な関心として35年近く聞き続けてきた。これまで10数回、ブエノスアイレスとモンテビデオに赴き、現地の人といつもされてきた質問がある。「なぜ日本人はそんなタンゴが好きなのか?」…いつも答えに窮しつつ、当初は「感傷的なメロディが日本人の好みに合うのだ」といった通説を繰り返していたが、それだけではないな、といつも思っていた。

タンゴは1910年代前半から世界各国にダンスとして広がっていき、フランス、ドイツ、イタリアの作曲家によるタンゴの名曲も作られ、トルコ、ギリシャといった周辺諸国の歌謡にもタンゴのリズムが使われ、中にはフィンランドのように独自のタンゴ歌謡とダンスの伝統を作りあげ今まで存続している地域すらある。日本にもタンゴ調の歌謡曲が戦前からたくさん作られてきた。

しかしアルゼンチンの人たちの「日本人はタンゴをとりわけ好む」という認識は、このタンゴの全世界的な流行と受容の過程とは別の部分に起因しているように思える。両国のタンゴ愛好家からは欧州をさしおいて、日本は「タンゴ第3の祖国」(第1がアルゼンチン、第2がウルグアイ)とまで言われているのだ。

アルゼンチン・タンゴの発展史を研究してきた私だが、ここ10年ほどは日本におけるタンゴの受容についても強い関心を持ってきた。それは欧州・米国経由で日本に入ってきたタンゴなのに、特に識者や演奏家が常にルーツとしてのアルゼンチンを強く意識し、現地におけるタンゴの演奏スタイルを熱心に追求してきた事実に興味を抱いたからである。

一般の日本人にタンゴがお目見えたのは1914年、米国人ペアによる劇場公演だった。新聞では話題の「欧州最新流行」としてその前から紹介されていたものの、タンゴのレコードもなく、ダンスを教える日本人もいなかったので、この公演はタンゴ普及のきっかけにはならなかった。その後1921年頃から欧州帰りの詩人平野万里らが知り合いに教え始め、さらに1926年に目賀田綱美が帰国して、周囲にパリ仕込みのタンゴ・ダンスを教え始めた頃から状況は変わっていく。目賀田の弟子である森潤三郎は1930年に出版されたタンゴ・ダンス教則本の中で、タンゴはアルゼンチンがルーツであり、アルゼンチン録音のレコードで踊ることが最も良い、と記している(写真1)。日本流に流れることに否定的な態度は当時の状況を考えれば理解できるが、欧州を正統とみなさずに、そのかなたにある未知の国アルゼンチンを、レコードだけを通じて正統で



写真1:「アルゼンチンタンゴの踊り方」
(以下写真はすべて筆者撮影ならびに筆者コレクションより)

あると言い切る目賀田らの確信は当時としてはかなり異色のものだったにちがいない。

並行してイギリス式の社交ダンスのスタイルのタンゴも流入、欧州で録音されたタンゴ・レコードも多数発売され、アルゼンチン・スタイルにこだわりを持つ専門家たちと、アルゼンチン/欧州の区別なくタンゴを楽しむごく一般的な音楽ファンやダンスファンという2つの層が日本のタンゴの基層を形成することになる。しかしこから日本独自のスタイルが出来る間もなく、戦争によってその流れは一旦断ち切られてしまう。

戦後は海外文化の流入経路がアメリカ中心となるが、それまでのアルゼンチン・タンゴにこだわってきたベースが生きされ、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京(歌手:藤沢嵐子)(写真2)など明確にアルゼンチン・スタイルを指向したタンゴ樂団が多数登場す



写真2：早川眞平とオルケスタ・ティピカ東京

る。民間ラジオ放送の登場もタンゴ楽団結成の後ろ盾になった。いわゆる戦後日本のタンゴ・ブームと呼ばれるのはこの1950年代～1960年代前半である。

戦前には来なかつたアルゼンチンからタンゴ楽団がやってきた最初は1954年のファン・カナロ楽団だった（写真3）。そのレパートリーのいくつかが、今年生誕100周年を迎えた現代タンゴの巨人アストル・ピアソラの若き日の編曲だったことは偶然とはいえ象徴的である。1961年にはファン・カナロの兄で「タンゴ王」と呼ばれたフランシスコ・カナロの楽団が来日、以降現在に至るまで毎年のようにアルゼンチンからタンゴ楽団が日本にやってくるように



写真3：ファン・カナロ楽団

なつた。

しかしダンスに関しては、いくぶん事情は違つたようだ。私自身はタンゴ・ダンスをしないので、あくまで観察者なのだが、残された資料から気づいたことがある。それは1986年、ブロードウェイで大ヒットして日本でも公演されたタンゴ・ダンス・ショウ「タンゴ・アルゼンチーノ」の日本公演以前、アルゼンチン式のタンゴ・ダンスは、タンゴ愛好家の間でもそれほど実践されていなかつた、ということである。

私の手元に1967年に来日したアルマンド・ポンティエル楽団を迎えて行われたタンゴ愛好家のダンス・パーティのフィルムがある。その時たまたま来日してその場にいたフォルクローレの巨匠アタウアルパ・ユパンキがタンゴを踊っている様子がとらえられているのも興味深いのだが、私の気を引いたのは、参加者たちがポンティエルの演奏で社交ダンスのタンゴを踊っている点であった。来日楽団にタンゴ・ダンサーが帯同するケースもあり、そのパフォーマンスは見られていた筈だし、愛好者を対象にレッスンなどもあったよ

うだが、それを継続的に続ける背景は整つていなかつたのだろう。

オルケスタ・ティピカ東京の1964年の南米巡演、オルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ（オルケスタ・サカモト）の1967～68年の世界ツアー（写真4）に象徴される演奏家のアルゼンチン・スタイルの追求度合いに比して、タンゴ・ダンスのアルゼンチン化は意外と進んでいなかつたのだ。

「タンゴ・アルゼンチーノ」以後（写真5）、日本のみならず世界のタンゴをめぐる状況は劇的に変化した。同公演の出演者たちが積極的にレッスンを行い、社交ダンスとは違う現地におけるタンゴ・ダンスの姿が可視化されていった。さらにもう一歩進むと、ステージ上で観客に見せるスタイルと、ブエノスアイレスの一般大衆が踊る日常的なタンゴのスタイル（いわゆるサロン・スタイル）が異なること、そういうダン



写真4：坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ (米国録音)



写真5：「タンゴ・アルゼンチーノ」オリジナル・キャストによるレコーディングの日本盤

スが「ミロンガ」と呼ばれる場所で踊られていることなどが知られていく。今では世界の主要都市で週末に「ミロンガ」(アルゼンチン・タンゴのダンス・ホール、ダンス・パーティ)が行われていない場所はないのではないかと思えるほど広がっている。それにともない、日本のタンゴ・ファンの好みもよりアルゼンチン化した。かつてレコード愛好家の考えるタンゴの「真髓」は1920年代末の第1次黄金時代のものだったが、今ミロンガなどで踊るタンゴ愛好者の好みは、アルゼンチンの一般的なタンゴ・ダンス愛好者とほぼ同じ、つまりファン・ダリエンソやアニバル・トロイロに象徴される第2次黄金期(1940年代)のタンゴに集中している。演奏家の本格志向にダンス愛好者が追いついたと言っては変かもしれないが、興味深い現象である。

そうした形でこの30年ぐらいの間に全世界のアルゼンチン式タンゴ・ダンスを愛好する人口は爆発的に増えたのだが、それ以前には日本人、それも一般の音楽ファンというよりは専門的に愛好してきた熱心なファンや演奏家の存在

が、日本をタンゴ第3の祖国と、現地の人たちに思われるほど、熱心さで目立っていたのだろう。

さらに世界的な流行期以後はタンゴ愛好の歴史をもたなかった、韓国・中国・台湾などのアジア諸国でも相当な数の熱心なタンゴ・ダンス愛好者が登場し、バンドネオンを含めタンゴ専門の演奏家も数多く登場、日本の演奏家らとの交流も盛んである。ブエノスアイレスのプロ演奏家向けに20年ほど前に設立された、伝統的なタンゴ奏法を学ぶためのオーケストラである「タンゴ学校オーケストラ」(オルケスタ・エスクエラ・デ・タンゴ)(写真6)には、毎年日本やアジアの演奏家がオーディションに合格し参加している。

タンゴという音楽とダンスが世界に発信され始めておよそ110年、今までアルゼンチンという原点に回帰しているように見えるのは、インターネットの普及による、遠隔地との情報交換が容易になった点が大きい。しかしすべてが遠隔で済むわけでもなく、少なくとも新型コロナウィルス感染症の蔓延以前はタンゴ・ダンスを学

ぶためブエノスアイレスに渡る外国人や、楽器のレッスンを受けに来る演奏家たちの往来は本当に盛んだった。

日本には人の移動にともなって入った来たわけではない音楽文化が数多くある。ラテンアメリカの音楽の場合はほとんどが欧米経由、そしてレコードを通じて到着したものだ。今でこそ、インターネットのおかげで、情報はあふれ、かなり珍しい音源でも探し出すことが可能になった。でもその一方でかつてのレコードはインターネットに決して劣らない、異文化理解のすぐれたメディアだった。しかもすべてがわからない分、すさまじい知識欲を掻き立ててきたのだとも今強く思う。それこそが「日本人はタンゴが好きだ」と現地の人に好意的に思われる理由だと思える。

でもこの認識はそのうちなくなってしまうかもしれない。それぐらいアルゼンチン式タンゴ・ダンスの世界的広がりは急速である。最後にこの点を示す象徴的なエピソードをあげておこう。数年前、ブラジルの歌手とデュオを組んでいる、アルメニア出身・ロサンゼルス在住のジャズ・ピアニストが日本に来た際に、私がタンゴの研究家と知ってこう質問してきた。「東京のどこにミロンガがあるか?」…彼はタンゴは一切演奏しない。でもアルゼンチン式のミロンガでタンゴを踊ることを最高のレクリエーションとしていたのだ。こんなことが驚きでなくなる日もそう遠くないだろう。

(にしむら ひでと 名古屋大学非常勤講師、
南米音楽紹介 PaPiTa MuSiCa 共同代表
<http://papitamusica.com.ar/>)



写真6：タンゴ学校オーケストラのリハーサル風景